



Title	A CORPUS-BASED STUDY OF NOMINALISATIONS IN ENGLISH
Author(s)	梅咲, 敦子
Citation	大阪大学, 1996, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/39714
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	梅 咲 敦 子
博士の専攻分野の名称	博 士 (言語文化学)
学 位 記 番 号	第 1 2 5 5 7 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 8 年 3 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学 位 論 文 名	A CORPUS - BASED STUDY OF NOMINALISATIONS IN ENGLISH (コーパスに基づいた英語における名詞化に関する研究)
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 齊 藤 俊 雄 (副査) 教 授 中 西 暉 教 授 渡 部 眞 一 郎

論 文 内 容 の 要 旨

1. はじめに

1. 1 目的と概要

ある表現形式 (form) が、可能な形式の中から選択される要因を特定することは難しい。さまざまな、動詞の名詞化についても、同様である。本研究では、動詞の名詞化の要因を探るために、コーパス (実際に使用された英語を機械可読形式に編集したテキストの集合体) を調べる。さらに、本研究を通して、コーパスを利用した研究の方法と可能性について考察する。

1. 2 コーパス分析

BROWN コーパス (書かれたアメリカ英語を15カテゴリー別に総数100万語集めたコーパス)、LOB コーパス (BROWN コーパスのイギリス英語版)、London-Lund (LLC) コーパス (話されたイギリス英語を12カテゴリーに総数50万語集めたコーパス) は、サンプルコーパスに属し、カテゴリー別にある年代の各テキストを決まった語数ずつ抜き出して編集されたコーパスであるに対し、使用された言語を次から次へと大量に蓄積してゆくモニターコーパスと呼ばれるコーパスも考えられている。

本研究では、イギリス英語のコーパスLOBとLondon-Lund コーパスを使用し、アメリカ英語との比較のためにBROWN コーパスを利用する。さらに、独自に作成した、自然科学分野の口頭発表と論文 (口頭発表と同タイトル、同著者による) を集めた「コーパス」を分析する。

1. 3 動詞の名詞化の形式

狭義には、節構造に対応する名詞句の形式で (A noun phrase which has a systematic correspondence with a clause structure will be termed a nominalization. (Quirk et al., 1985, p.1228)), 節の動詞の名詞形が名詞句の主要部 (head) となる場合が動詞の名詞化といえる。他方、広義には、文中で名詞と同様の機能を果たす節がすべて名詞化と規定されることもある (Lees: 1963, 井上他: 1985, pp. 154-168)。そのなかには、事実名詞化 (Factive Nominalization: *that*-節, *wh*-語節), 動名詞名詞化 (Gerundive Nominalization), 不定詞名詞化 (Infinitival Nominalization) も含まれている。

本研究では、まず、以下の他動詞の名詞化の形式の使用状況について調べる。

(a)-tion/ment/etc*+of+O** (e. g. *the destruction of a city*)

(b)-ing+of+O (e.g. the destroying of a city)

(c)-ing+O (e.g. destroying a city)

・動詞から派生し、動詞とは異なる形をした名詞で-ing派生語尾のものを除く

・対応する動詞構造で動詞の目的語として使用される名詞句

1. 4 名詞化選択の要因

名詞化が選択される要因は、大きく4つのレベル、即ち、語彙文法レベル（音声的要因を含む）、ディスコースレベル、地域言語変種レベル、歴史的言語変遷のレベルに分けられる。他動詞名詞化形式(a), (b), (c)については、それぞれのレベルで以下のような指摘がなされている。

語彙文法上、Quirk et al. (1985, p.1551) は、(a)*His exploration of the mountain took/will take three weeks.*と(b)*His exploring of the mountain is taking a long time.*の間にアスペクト的相違を指摘し、(a)は行為の完結と行為全体を意味するのに対し、(b)は必ずしもそうではないと述べている。Chomsky (1979, pp.192, 214-215) は、(a)*the growth of potatoes*と(b)*the growing of potatoes*を例に、of-前置詞句内の名詞句が、名詞化された元の動詞の主語の働きをするか目的語の働きをするかの相違があることを指摘し、彼の理論を展開している。Poutsma (1926, p.467) は(c)型は(a)型よりも動詞的性質が強いと述べている。

ディスコース上の相違は、レジスター、レトリック、テキスト構成面の3つに分けられると考えられるが、Halliday (1985) では、口頭語のレジスター (Spoken Register) と文章語のレジスター (Written Register) の相違に名詞化の関与を指摘している。

歴史的には、齊藤 (1990, p.380) は、(b), (c)型は16世紀には、ほぼ同じぐらいの頻度で使用されているが、17世紀に(b)型が急速に衰え、(c)型が優勢になるという研究結果を述べている。

1. 5 本研究の構成

要因を語彙文法レベルに求めた研究は数多くあるが、本研究では、さまざまなレベルの要因を総合して調査する。コーパスは、実際に使用された英語を、コンテキスト付きで提供してくれる為、総合的調査を可能にする。第1章では、既存のコーパス、新たなコーパスの構築、コーパス分析法について論じ、第2、3章で、既存のコーパスから、他動詞名詞化(a), (b), (c)型を抽出し、要因を探る。第4章では、コーパスを数量分析以外に利用する方法として、コーパスの用例を利用してアンケートの質問を試み、コーパスでは使用されていない他動詞名詞化の形式の容認度を調べる。第5章では、名詞化を広義にとらえて、動名詞と不定詞名詞化について考察するために、*begin*, *start*, *continue*の動詞補部における使用状況を調べ、語法分析におけるコーパスの意義を考える。第6章では、個人の関心事項を調べるのに適したコーパスを構築し、その使用例として、広義の名詞化形式 *that*-/*wh*-語節、動名詞、不定詞名詞化を取り上げ、語彙文法レベル、ディスコースレベルから、口頭語のレジスターと文章語のレジスターの相違を分析する。第7章では、名詞化の選択される要因について、分析結果をまとめるとともに、本分析から得られたコーパス利用の利点と限界をまとめ、将来の可能性について触れる。

2. 他動詞名詞化: (a)-tion/ment/etc. +of+O, (b)-ing+of+O, (c)-ing+O

他動詞名詞化(a), (b), (c)の形式をLOB, LLCコーパスのカテゴリー“Face-to-face conversation” (LLC: S1, S2) “General fiction” (LOB: K) “Press reportage” (LOB: A) “Academic prose” (LOB: J) から抽出した。その結果、4つの中では、最初の2カテゴリーが最も類似していることが判った。(F検定の結果とも一致する。) また、(a), (b), (c)全ての形が、“Academic prose”で最も頻度が高いことも判った。これらの相違は、レジスターが形の選択の要因となりうることを示している。

文法機能別の出現頻度をみると、(c)型は、主語として用いられる頻度が、(a), (b)型に比べて、非常に少ない。これは、Poutsma (1926) が指摘するように、(c)型は他の型よりも動詞性が高いため、テキスト構成上、主題 (Theme) となることの多い主語としては、他の形が選択される理由によると考えられる。

3. -ing+of+O

(b)-ing+of+O型の頻度は、他の型に比べて、著しく少ない。特に、-ing派生名詞が別の派生名詞形を持つ例は、LOB, LLC計449例の(b)型中、45例であった。45例について、(a)型ではなく、(b)型が選択されている要因を考察し、次の(b)型選択要因を指摘した: (1)(a)型の名詞が行為を表さない場合 (e.g. *plantation*), (2)結果ではなく行為に

焦点がある場合（含アスペクト的相違）、(3)ofの目的語が動名詞構文の意味上の目的語の場合、(4)ディスコース、レトリック上の理由。

4. アンケート調査

2, 3で得られた結果をもとに、別の表現の可能性を知るために英語母語話者、約50人にアンケート調査を行った。設問は、コーパスから文脈を付けて取り出し、別の表現を二者択一形式で加えて作成した。結果として、(1)3で得られた要因がある場合には、コーパスと同様に(a)-tion/ment+of+Oではなく(b)-ing+of+Oが用いられる例もあるが、コーパスとは異なり(a)型が(b)型の代わりに選択される傾向もみられた。(2)主語の位置では(a)型が(c)型より好まれる。(3)コーパス分析では、補語の位置には(c)型が用いられることは少ないという結果であったが、アンケート分析では、(b)型よりは(c)型のほうが、補語の位置でも好まれることが判った。また、年齢による差も見られた。(b)型は歴史的に、他の型にその役割をゆずり、ごく限られた場合にしか使用されなくなっていると言える。その時代ごとに表現形式の選択は変化するからには、言語の使用される時代も(b)型選択の要因と言えよう。

5. 動詞補部の不定詞名詞化と動名詞名詞化の選択

begin, *start*, *continue*の動詞補部には、不定詞、動名詞のどちらでも使用できると Quirk et al. (1985) は、記述しているが、実際に差がないかどうかを、BROWN, LOB, LLC コーパスから全て用例を抽出して頻度、テンス、アスペクト、無生物主語との結びつき、非定動詞の語彙について調べた。結果として、BROWNとLOBの間に、*begin*の補部の不定詞動名詞の使用に有意差があることが、統計処理により判った（英米語の相違）。レジスターごとの相違を認める結果は得られなかった。*begin*は補部に動名詞よりto-不定詞をとることが多く、*start*はどちらもほぼ同数であり、*continue*は、大半の場合、to-不定詞をとることが判った。to-不定詞の使用をモダリティと関連づけて考察した。

尚、本分析には、タグつきLOBコーパスも使用したが、タグの精度が100%でないことも判った。

6. 個人作成コーパスにおける名詞化

2, 3では、主題と形の選択が関連づけられたので、本章では、同じ言語使用者による同じ内容の国際会議における口頭発表と論文を収集し、テキスト形成上主題部に何を使用しているかを比較した。また、それらのテキストが、LOB, LLCの各カテゴリーと比較して、どのような特徴を持っているかを調べた。

7. 結論

7. 1 名詞化の選択要因

他動詞名詞化では、調査の限り、語彙文法、ディスコース、歴史的言語変遷の3つのレベルに、その選択要因があることを示す結果が得られた。動詞補部の不定詞、動名詞選択では、地域言語変種、語彙文法レベルにその要因が確認され、ディスコースレベルにはその要因がないことを示唆する結果が得られた。名詞化でもその形式、機能により要因は異なるところに存在し、さらにその要因は語彙文法レベルに限らないことが言えよう。

7. 2 コーパス分析の可能性

コンピュータを使った頻度調査は、5のように、特定の語について検索するほうが、2, 3で行った名詞化のような統語上の項目についての検索よりも少ない時間と労力でできる。

非母語話者には、コーパスでは使用されていない他の可能性を判断することは難しいが、コーパスの用例はアンケート調査に、文脈つきで試せる利点がある。(4参照)。LOBやLLCなどのサンプルコーパスでは、さまざまなカテゴリーのテキストを、同時に分析対象とする事ができ、既存のデータ(Biber, 1988等)との比較により、個人の分析するテキストや個人が作成したコーパスの特徴を知ることでもできる(6参照)。同じ編集のLOBとBROWNコーパスは、英米英語の比較を可能にし、普通には差がないと考えられる用法に、統計処理の結果、英米間の相違があることが示せた(5参照)。

但し、BROWN, LOB, LLCコーパスは、各総数100万語、100万語、50万語であり、5に見られたように、これらのコーパスには現れないが、さらに巨大なコーパスでは存在することもある。また、テキストの一部を決まった数(2000語等)だけ編集してあるために、テキスト全体の構成の推移を見ることはできない(6参照)。これらの、限界には、the Bank of English等の大規模コーパスが答えてくれることが期待される。

引用文献

- Chomsky, N. (1979) "Remarks on Nominalization," in Napoli, D. J. and E. N. Rando (1979) *Syntactic Argumentation*, Georgetown University Press, Washington, D. C.
- Halliday, M. A. K. (1985a) *Spoken and Written Language*, Oxford University Press, Oxford.
- Lees, R. B. (1963) *The Grammar of English Nominalizations*, Mouton, The Hague.
- Poutsma, H. (1926) *A Grammar of Late Modern English, Part II, the Parts of Speech II*, P. Noordhoff, Groningen.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman, London.
- Saito, T. (1990) "The Development of the Gerund in Modern Colloquial English," *Eigoeibungaku Kenkyu*, Nan-un-do, Tokyo.
- 井上和子, 山田洋, 河野武, 成田一 (1985)『現代の英文法 6 名詞』研究社。

論文審査の結果の要旨

本論文は、英語における動詞の名詞化—特に目的語を従えた他動詞の名詞化 (V+O $\Rightarrow$ (a)-tion/ment/etc. + of+O, (b)-ing+of+O, (c)-ing+O)—の実態とその要因を探る研究である。本人は先に修士論文において、科学英語における書き言葉と話し言葉の両種を比較することによって、科学英語における名詞化全般の過程を究明する成果を示したが、本博士論文は、他動詞の名詞化に限定して、その実態と要因を究明している。

本論文の大きな特徴は、表題にあるとおり、コンピュータ利用のコーパス言語学的手法を駆使した極めて斬新な研究手法にある。既存の代表的な英語コーパス Brown Corpus, LOB Corpus, London-Lund Corpus を検索すると同時に、本人が作成した科学英語のコーパスをも加えて、数量的に統計的に有意な用例数を収集して、適切な統計処理をすることによって、当該の問題に対してこれまでにない信頼性の高い回答を与えている。さらに、当該問題についての既存のコーパスを利用したアンケート調査を、多数の英国人を被検者にして行っているが、その結果も調査結果に有益な判断材料を与えている。

本論文の主要な成果は、次の通りである。

1) 他動詞名詞化(a), (b), (c)型の4つのテキスト・カテゴリー別の分布状況を数量的に提示した。従来の研究においても、動名詞の型である(b), (c)の頻度調査が行われているが、本論文のように、動名詞の枠を超えて、名詞化という立場から、派生名詞の型(a)をも取り上げ、3者の対比による分布状況の本格的な統計的調査は初めてであろう。

2) この3種の名詞構文は、テキスト・カテゴリーによって頻度が違い、文語性の高い“academic prose”において最も頻度が高く、この名詞構文の文語性の強さが解明された。

3) 文法機能上では、主語としては、(a), (b)が普通であり、動詞性の強い(c)が避けられることが実証された。

4) 数量的に(b)型は他の2つの型に比べて著しく少なく、これは名詞性の強い(b)型が派生名詞の(a)型に取って代わられる、動名詞構文の歴史的傾向を裏付けるものである。さらに、現代英語に残存している(b)型の用例の選択要因を丹念に調査・検討した。

5) 1961年出版の英語資料を集めた LOB コーパスの上記3型の用例を利用したアンケート調査は、30年後の現在、英国英語では(a)または(c)型が好まれ、(b)型はさらに減少するという、歴史的傾向に合致する結果を示した。

6) 動詞補部の不定詞名詞化と動名詞名詞化の選択の調査では、Brown と LOB の間に有意差があり、英米語の2変種間に相違があることが証明された。

7) 他動詞名詞化の選択要因は、単純ではなく、語彙文法、ディスコース、歴史的言語変遷の3つのレベルにまたがっていることが解明された。

このように本論文は、コンピュータを駆使した調査であるが、ただ単に頻度の実態調査をただけでなく、その選択要因も充分な考察を行っている。またコーパスの用例を利用したアンケート調査は、これまでにない本人の独創に

なる興味深いものであり、このアンケート調査の章だけでも、十分に独立の論文になるうるものを持っている。

本論文は、新興のコーパス言語学の利点を示すとともに、Brown, LOB 両コーパスの欠陥・限界をも指摘し、今後のコーパスの在り方についても述べている。

いずれにしても、我が国は英語コーパス言語学の面では、西欧に甚だしく立ち後れているものであるが、本論文は、日本人のこの分野に対する数少ない実質的な貢献の 1 つと言えるものである。

以上により、本論文を博士（言語文化学）の学位請求論文として十分な価値を有するものと判定する。